

会 議 要 録

会議名称 令和6年度 第2回 市史編さん委員会
開催日 令和7年2月6日(木) 午後3時～
会 場 夢咲くら館2Fれきしルーム2
出席者 市史編さん委員
内田儀久委員長 中澤恵子委員 宮間純一委員
小高春雄委員 川名禎委員
事務局
利光尚佐倉図書館長 丸島正彦主査補 日暮冬樹学芸員

記録作成 日暮冬樹

会 議 内 容

〔事務局〕

定刻になりましたので、開会とさせていただきます。

本日は外山信司副委員長、岩淵令治委員を除く、過半数以上のご出席がございますので、市史編さん委員会を開催することといたします。

なお、本会は佐倉市情報公開条例第20条により会議公開とされ、後日議事録が市政資料室に開架されますことを申し添えます。

はじめに、佐倉図書館長よりご挨拶を申し上げます。

〔佐倉図書館長〕

皆様こんにちは。佐倉図書館長利光です。本日は、活発なご議論、ご意見どうぞよろしくお願いいたします。

ここから先は委員長に進行をお願いいたします。

〔内田儀久委員長〕

委員会条例に基づき、議長として議事を進行させていただきます。それでは、事務局から会議のなかの【報告】1の来年度の予算見通しについて、説明をお願いします。

〔事務局〕

〔報告〕1として、令和7年度の市史編さん事業の予算の見通しについて述べさせていただきます。市史編さん室一般管理費は、市史編さんの事務運営に関わる一般費用になります。38万5000円ということで、前年度に比べて4000円ほど減額となっていますけれども、ほぼ例年並みについている形になります。

②市史資料整理保存事業という経常費は、資料の整理に関する一般的な諸雑費に関する費用になりますが、558万円です。こちらには古文書整理員の人件費等が入っていますので、金額的には市史編さん事業の中では、一番高い金額となっています。若干、昨年度に比べますと増えていますけれども、古文書整理員の人件費の単価が少し上がったので、人件費自体と社会保険費などが増額となりました。去年より少し金額が高くなるという予定になっております。歴史資料のデジタル撮影が、この事業には入っておりまして、33万円ほどついております。

③番目として、市史資料調査・収集・保存事業がございます。②番目の市史資料整理保存事業とほぼ同じ性格ですが、こちらは臨時費でございまして、細かい事業ひとつごとの費用を、多く計上させていただきました。それをついたのが16万8千円になります。

今年度は53万8千円ついていたんですが、マイクロフィルム撮影費委託分が、減額になっています。

その他に、予算計上をしていましたが、査定されなかったものは、マイクロフィルムの複製資料の作成燻蒸委託、古文書の資料購入費があります。

④番目市史資料普及事業は、刊行物や講演会等のイベントの事業費になります。今年は、佐倉市研究の印刷製本費と、あと原稿執筆費料がついて、77万5千円になる予定でございます。

昨年と今年を較べますと、マイクロフィルムの撮影委託が削られてその代わりに、『佐倉市史研究』の刊行費がついた形になったと言える予算見通しということになります。以上です。

〔内田儀久委員長〕

ありがとうございました。只今事務局から来年度の予算見通しについての説明がございましたけれども、これについて皆様のご意見或いはご質問をお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

〔宮間純一委員〕

『佐倉市史研究』の予算がつきそうだということはよかったと思うんですが、一方でマイクロフィルムの複製費とかは減らされてしまっているんですけど、これはもう複製物は要らないという話なんですか。

〔事務局〕

要らないとまでは言わないまでも、あまり高い評価は得られていないかと思います。

〔宮間純一委員〕

燻蒸は図書館ができたという时期的なものがあったと思いますが、資料の購入は、購入すること自体が難しいというのもわからないのではないんですが、複製物を作る予算が削られてしまったのは、今後もつかなくなっちゃうと、ちょっと問題というか残念だなという感じがします。

〔事務局〕

コロナ以降、予算が減少し、復活できない状況なんです。

〔宮間純一委員〕

53万円が16万円に減ったのは、燻蒸費が主なものということですかね。

〔事務局〕

主なものは、マイクロフィルムの撮影費ですね。今年は37万円ついていまして、それが16万円に減額になったという感じです。

燻蒸は、結局一昨年引越しに合わせて予算が付きました。以前燻蒸をやっていた時は、新規に受領した資料について、30万から50万円ぐらいの費用で、小規模にやっていりましたが、その予算がつかなくなり、図書館への引越しの時にとりあえずつけてもらってある程度燻蒸をしました。来年度は、新しい寄贈品などを燻蒸していきたいなと思って予算を要求したのですがつきませんでした。

〔宮間純一委員〕

今年はダメでも引き続き要求はし続けることを、お願いしたいと思います。

〔事務局〕

昨年は燻蒸がついたのですが、それが今年度はなくなって、マイクロフィルム撮影費が久し振りに予算が付きました。来年度はそれがなくなって、市史研究に予算がつくという形です。

〔宮間純一委員〕

全体額は少し多めになっているんだと思いますが、結局どこかで帳尻を合わされている感じがします。

〔中澤恵子委員〕

複製や撮影をしなくてはいけない資料はあるけれども出来ないということですね。候補資料はあるけれども、それよりも『佐倉市史研究』を優先したということではないんですよね。

〔事務局〕

複製品は、下総佐倉堀田家文書を中心にして、現在「年寄部屋日記」をいわゆる紙焼き版を作っている途中で中断しているのを再開したいのですが、それがままなりません。

マイクロフィルムの撮影も佐倉厚生園文庫調査団が整理した堀田家文書について、大正昭和期と建築関係をマイクロフィルム撮影すれば、一通りマイクロフィルムになるので、少なくともそこまではマイクロフィルム撮影をおこないたいと思っていますが、なかなか、予算が復活しないという状況です。

そこまではマイクロフィルムを撮っていこうという計画は作ってあって、実施計画も査定されているんですけども、なかなかその都度予算措置がなされないという感じです。計画はありますので、引き続き予算要求していきたいと思っています。

[内田儀久委員長]

いかがでしょうか。

[事務局]

なかなかデジタル化とそのマイクロフィルムの撮影のどちらかを優先するかという話になると、今はどうしてもデジタルアーカイブの方を優先してやってくれという判断にどうしてもなってしまうので、そこは両方セットでやっていきたいというところはあるんですけども、デジタル化の方が広く利用できるということになってしまいます。

[宮間純一委員]

②の方でデジタル撮影の予算がついてるんですね。

[事務局]

そうですね。このご時世、デジタル化のほうの方が理解がしやすく、マイクロフィルムの場合だとどうしても利用が限定されてしまう感じになってしまいます。一応市民が一般利用できる体制は整えているんですけども、なかなか一般の方で利用する方はまだまだ少ないところです。

[川名禎委員]

今回『佐倉市史研究』に予算が付いたのには、何か理由があるのですか。

[事務局]

文化振興積立基金という佐倉市の基金がありまして、そちらの方を充当して予算にさせていただいたという形になっております。その基金の充当というのが、再来年、またその翌年に続くかということ、続かない可能性の方が大なので、その辺も考慮して本を作って評価を高めていく必要があると思っています。

今回、市全体でかなりの予算の削減を来年度はされるということになっていまして、図書館の費用はかなり減額がされています。そこで、財政部局と交渉する時に、基金の活用を含めてとにかく『佐倉市史研究』だけは残すみたいな話をして、とにかく『佐倉市史研究』だけはやらせてくれということで、今回これに至ったというような内情です。

『佐倉市史研究』は中断して3年になりますが、歴史のまち佐倉としてそれで良いのかと委員の皆様からご意見をいただいている中で、そういう危機感を企画や財政に言って、これだけは何とか出したいという強い願いがあるということを出していただきました。

でもお金の問題ならば、佐倉市の予算全体の中で約70万円の話なので、やる気や姿勢や方向性がちゃんとしていれば、たぶん無理な話ではないと思いますので、主管課である文化課と協議いたしまして、少しまわしてもらって予算をつけてもらったという感じです。次の議題になりますが、どのような形で市史研究を復刊させていくかが一番大事なかなと思います。今後も続けていくためには大事なことだと思います。

[川名禎委員]

先ほど質問したのは、毎年同じような額の中でまわしていくようなイメージでお話されていたのではないですか。基金を使ってやる場合、マイクロフィルムの複製とか燻蒸にも使うことは可能なんですか。

[事務局]

可能は可能なんです、管轄している課は文化課になります。文化課もいろいろな事業を抱えています。佐倉市は古い商家の復旧事業であったり、いろいろな補助金などにも充当しています。必要に応じて基金を使うことは可能なんです、今回は特に『佐倉市史研究』が復刊できていない状況にあるので、文化課も承認してくれました。今後に関しては、また新たな考え方で予算化していかないと難しいかなと思います。

[内田儀久委員長]

それではよろしいでしょうか。続きまして、【議題】1-1 来年度の『佐倉市史研究』第35号について説明をお願いします。

[事務局]

はい。まず初めに予算獲得の見通しについて、お話した通りなんですけれども、印刷製本費として52万8千円です。今まで『佐倉市史研究』は800部を刷ってきました。しかし、実際予算が計上されそうなのは、44万5千円ということで、だいたい印刷物500部程度の予算となりそうです。

また、執筆謝礼が30万円予算化される予定です。こちらはこれまで通りです。ですから、刊行部数を減少していくということを、1つ考えていかなければいけないことになります。今までは、掲載論文の数が増えて、冊子の頁数がかさむこともあったのですが、その辺の調整が費用的にうまくいくかどうかという不安があると思います。

来年度刊行予定の『佐倉市史研究』第35号に掲載を予定している論考としては、次のものがあります。講演録がおとしの鈴木凜先生の『「百姓一揆物語」から読み解く江戸時代一惣五郎物語とその読者たち』と4日前におこなわれた外山信司先生『津田仙と佐倉藩小島家』の2本がごさいます。

そして一般の市民の方からの投稿が2本ごさいます。『「壺碑」をめぐる論争からみえる元禄の「職業文人」と「庶民」』と「堀田宮という生祠と仁政碑」の2本です。ただ、少し手直しが必要と思われる。

あと、掲載希望のお話を聞いていて、実際書いていただけるかどうかわからない論考3本ごさいます。また、実際これからの『佐倉市史研究』に掲載していくかどうか検討する必要があると思います。旧来の『佐倉市史研究』に掲載されていた定期的掲載記事として、「佐倉市の出来事」・「受贈図書目録」・「市史編さん担当日誌」・「寄贈資料について」・「編集後記」がごさいます。

このような掲載予定記事があるんですけれども、今までお話ししてきたとおり、必ずしも『佐倉市史研究』の一般的評価が高くない現状を考えると、記事の内容を見直していくことも考えなければいけないと思われます。たとえば、少し『佐倉市史』の刊行から時間が経ちまして、新しい研究も増えていることをふまえて、市史編さん委員の先生方に『佐倉市史』の内容と最新研究を比較していただいて、『佐倉市史』に足りない部分を原稿化していただくようなことはどうであろうかと思っています。最近では歴史教科書の内容の変化を指摘した本の売れ行きも良いようでもありますし、このことは新しい佐倉市史を作る必要性も一般に広めていくものになると思います。

もうひとつ、史料の見方ということで、今年は『城下町佐倉絵図集成』が刊行されまして、非常に売れ行きが良いようですが、このような史料の見方がわからない、史料の読み方を知りたいという声が少ないからあるようなので、そこに視点を向けた内容の論考を考えました。

ひとつには、よくあるパターンかもしれませんが、1点の史料を読み込んでいきまして、その過程をレポートして、史料の読み方を提示しつつ、限られた史料から多くのことを引き出す有り様を紹介するもの。

もうひとつは、有名な歴史的イベントは、どのような史料によって現在語られているのか、逆引き的に史料を紹介する記事はいかがでしょうか。緻密な論文ばかりではなく、少し一般的な記事を考えていく必要もあるように思います。

また、『城下町佐倉絵図集成』の売れ行きに乗じて、その補遺となるような記事も『城下町佐倉絵図集成』を購入した多くの人たちの関心を引き、購買力を引き出すように思います。

さらに、来年度は戦後80年になり、その特集も良いと思います。市史には、前回出した『写真に見る佐倉』刊行後に集められた写真がごさいます。特にJR佐倉駅前の区画整理をした時の写真は数があり、かなり読者の興味を引くものと考えております。

今年の市制70周年関連行事をまとめておくことは地味ですが、行政の記録として役に立つという指摘もごさいます。

以上のようなことを考えておりますが、先生方のご意見もいただきまして、どのような論考、記事を集めて掲載していくかをまとめていきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

[内田儀久委員長]

ありがとうございました。今事務局から説明がございましたけども、『佐倉市史研究』第35号が出るということで、それについて説明がございましたけれども、これについて、先生方のご意見がございましたならば、よろしくお願いします。

[小高春雄委員]

今までの話を聞いている限りでは、来年度の『佐倉市史研究』第35号については、基金という裏技を使って、何とか獲得したということなのかなと思います。『佐倉市史研究』第35号以降については、まだ未定というふうにも考えることもできるのか、まず確認しておきたいというのがあります。

[内田儀久委員長]

いかがでしょう。

[事務局]

先生のおっしゃる通りです。

[小高春雄委員]

わかりました。私は、今まで『佐倉市史研究』に載っている研究論文を見て感じたことなんですけれども、投稿される方のものを、そのまま受け取って続けていいものかなという疑問があるんです。

1つには『佐倉市史研究』をもう34号まで出してきて何がわかったか。逆に何がわからないのか。市民の反応はどうだったのか。今まで足りなかったところを、そういうものが書ける先生にお願いするというのも必要ではないかということを感じました。

もうひとつ話しますと、佐倉駅の区画整理の写真、こういうものは今まであまり取り上げられていない部分ですよ。そこに住んでいる人たちにとっては、新鮮な非常に良い企画じゃないかなと思います。やはり市民が、その必要性を認めて、市に対する反応があるということが、存続にとっては、大きな要素になるのかなと思いますね。

あと『城下町佐倉絵図集成』は、今までやらなかった宿題をやってくれたということで、私は評価しています。良い仕事をしてくれたと思っています。例えば松江市でも同じようなことをやっているんですけれども、こういう良い仕事を1つ1つやっていただけということがやはり重要なかなと思います。ただひとつ注文をつけると、絵図というのは、結構大きなものですので、細かい部分を知りたい。特に、研究者は、細かい記載まで知りたいので、その辺何らかの配慮が必要なのかなという気はしました。

でもこれは良い仕事ですし、おそらく方々からそういう評価があったと思います。以上です。

[内田儀久委員長]

ありがとうございました。今まであまりなかったご意見を伺いまして非常に参考になりました。他に何かございますでしょうか。

[中澤恵子委員]

一般の方からの投稿は、これは難しいなど、私も感じます。研究者の論文やそういうようなものを載せることと、一般の方たちが関心持っていたことを発表する場という両方の側面が、『佐倉市史研究』にはありますが、両方とも中途半端な形になってしまうことが、他の研究誌でもありませんし、佐倉市でもそういう印象がないこともないんです。

他のところでは、一般の方たちの原稿の査読をしていることがあります。編さん委員のなかでテーマによって査読する人を事務局が指定してくださることがあります。また、市史研究の編集担当者を委員の中から2人ぐらい選んで、審査や足りないところの指摘をお願いしたりしています。

投稿原稿を事務局が見て、査読に近いことを佐倉市ではしていらっしやる。私はあるところでは、編集の担当になって、投稿原稿を読ませていただきました。なるべく一般の人たちの投稿を大事にするという姿勢はありましたが、書き方の指導をしました。たとえば、注の入れ方とか、史料の読み方のこととか、気が付いたことを注意して修正していただいて掲載する。その修正が、締め切りに間に合わなかった場合には、次回にまわってもらう。

学会と違うので、一般の方たちの発表の場にしようという考え方からすると、そのようなことに時間をとって事務局だけが苦勞することは、大変なことだなと感じます。そういうことも、少し考えたほうが良いのかなと今のお話をうかがって思いました。

[事務局]

今のお話に関してですが、投稿内容の良し悪しもあるんですが、それ以前に文章が読みづらかったり、論文としての構成が悪くてそこから直さないといけなかったりするんで、なかなか難しいとは思っています。

ただ、市民の発表の場を完全になくすわけにはいかないんで、どの辺が落とすところなのかなと思います。

[中澤恵子委員]

もうひとつ私が佐倉市で経験していることなんですけれども、研究の投稿のご相談を受けましたが、その内容が全く佐倉市域と関係ないことだったんです。私はその方に、研究内容に関係している雑誌に投稿したらどうですか、というお返事をしましたところ、『佐倉市史研究』は一般の人には投稿しにくいのねという言い方をされて、なにかハードルが高そうなことを感じたみたいです。

たとえば、投稿の要綱の中に、出来るだけ佐倉に関係していることに限るとか何か条件をつける必要があるのではないのでしょうか。論文としての体裁が問題とされていますが、一般の方たちには必ずしも論文として出さなくても良い方法があると思うんです。論文の形式は難しいですね。

[宮間純一委員]

雑誌の掲載時には、「論文」ではなく、本来の「投稿」という名前で掲載していますよね。これは多分論文というのは、難しいやつを載せているからという区別の意識をしている。

[小高春雄委員]

今のことに関連するのですけれども、『佐倉市史研究』に皆さんが求めているのは、やはりある程度高い研究のレベルだと思うんです。ですから、今一般の人たちが、投稿するような内容にするようなことは、難しいのかな。むしろ、郷土史研究会の発表の場がありますけれども、私はそういう二段構えにしたほうが良いのではないかと思います。これだけ今までに研究の蓄積があるというのは、やはり『佐倉市研究』の成せる業ですから、この火は消したくないなと思います。

先ほど私が話したのは、今『佐倉市史研究』が危惧に立っているという現状からお話ししました。やっぱり今までのような流れの中で行くのは、大変難しいのかなという危惧もあります。ですから、少し舵を切るというわけではないんですけれども、ひとつ花火を打ち上げるようなことでも、やはり良いのではないかと思います。

[宮間純一委員]

投稿規定みたいなものは、市民に公開されているのでしょうか。

[事務局]

ちゃんと公開された規定はないです。

[宮間純一委員]

投稿規程を1回作ってみて、例えばその論文っていうのはこういうものですか、市民の方から投稿いただける歴史コーナーを作ってみるとか、もちろん市民の方も論文に投稿できるけれどもそれにはジャッジがあって、もしかしたらリジェクトされるかもしれませんよということもちゃんと明記していくとか、そういうふうに公明正大にやっておけば落とすこともできるし、載せたいと思うものは載せられます。今は多分研究者に声をかけて書いてくださいと頼んだり、或いは研究者自身が書かせてくれと言ってくるということが多いのではないのでしょうか。そうではなく、誰でも投稿できるようにしておくということは、ひとつの手かなというふうに思いました。原稿が採用されないこともあることが示されていれば、事務局としても安心だと思います。

[中澤恵子委員]

今までは、事務局が査読をなさったんですか。

〔内田儀久委員長〕

そうですね。私の前の代から始めたんです。市民の方の投稿も結構あったんですけども、予算がついていたので、投稿という形でやりくりしました。若干事務局でも原稿についてある程度指摘したと思います。

〔中澤恵子委員〕

私は査読には参加していませんでしたけれども、事務局の方から個人的に相談を受けていたもので、大変苦勞なさっているなと思っていました。

〔内田儀久委員長〕

担当の中でそうやっていたんですね。今先生方のおっしゃられるようなことがきちっと決まっていると、そこら辺もかなり楽だったのかなと思います。

〔中澤恵子委員〕

査読という言葉が、良いか悪いかわからないんですけども、その段階は絶対に必要かなと思います。小高先生がおっしゃられたように、あまり一般の投稿原稿に力を入れずに専門的なことをやっていくのも、それはそれで良いのかなと感じがします。

〔宮間純一委員〕

定期刊行物として『佐倉市史研究』第36号以降を出していきたいと考える時に、学術的な成果というのは、もちろん僕らとしては積み上げていかなきゃいけないものなんですけど、市の当局はそこを理解してくれるのかと言うと、なかなか難しいですね。そういう意味でさっきの最後の花火という言葉ははまるころがあると思います。

市民に向けてわかりやすいような企画とか、面白いなと思ってもらえるような仕掛けが必要だということはその通りなんですけど、多分雑誌単体でそれをやるというのは結構難しいと思うんです。『佐倉市史研究』はまず手に入れようと思わなければなかなか手に入らないんですよ。図書館に来て見るとか、販売しているところに行って買うとかして、みんな目的を持って『佐倉市史研究』を見に来るものなのです。なんとなく偶然に手に持って見るものじゃないんですね、多分。

たとえば、そういう意味では、講演録みたいなものは、比較的掲載しやすいし、市民の人も一般向けのお話であって、講演会で聞いたやつだから見てみようと思うかもしれないと思う。事務局が大変かもしれませんが、お金がかからないように、ここにいらっしゃる先生方に喋ってもらって講座みたいなものを作って、そこで喋ったことを活字にしてもらおう。それも字おこしじゃなくて、積極的に先生たちに書いてもらおう。原稿料や講演料は安くても、やってくださる方はたくさんいらっしゃると思います。もうちょっと何か他の事業と連携しながら、『佐倉市史研究』をアピールしていくのは、一案じゃないかと思います。『佐倉市史研究』単体でアピールすることは、ちょっと難しいのかなという気がします。

〔川名禎委員〕

そういう意味では、『佐倉市史研究』第35号が今後の流れをまずは決めるんだと思いますが、何か工夫されている点はございますか。

〔事務局〕

そういう流れを決める前に少し印象付けなきゃいけないのかなと思っている部分はあります。流れというよりも、『佐倉市史研究』第35号自体を少し特殊なものというか、単発的なものにしても、評判を取りに行くことも考えています。

〔川名禎委員〕

予定されておるタイトルなどを見せていただくと、割と従来通りと言いますか、そういう印象を受けるんですが、どうなのでしょう。

〔事務局〕

これらは、これまでの流れで用意してあった分というところもあります。良い企画があれば、『佐倉市史研究』第35号に、講演録を2本まとめて載せずに、『佐倉市史研究』第36号にまわして掲載することを考えても良いと思いますが、いかがなものでしょうか。

[川名禎委員]

先ほどもお話があった JR 佐倉駅前区画整理写真は、非常に関心もたれるんじゃないかということなんですが、行政との関係もあるのかもしれませんが、最近インフラが大分古くなって、いろんなところでガタが来ている問題がありまして、市民の方も喫緊の課題として非常に関心があると思うんですよね。だから、佐倉市の中で戦後どういうふうにインフラが整って、いつ頃どういうふうにできて、もうそんな時間が経ってるんだということを、皆さんがわかるように客観的な総括するような企画があったら、歴史に興味がない方も非常に関心を持つんじゃないかなと思います。行政のいろんな部署との折り合いもあるから、あくまでも歴史的な観点で取り扱うということですね。良い悪いということではなく、いつごろ出来て、今こういう状態にあるということが、歴史としてわかる企画があったら面白いなって思いました。

[小高春雄委員]

今のことに関連するんですけれども、鉄道が房総に行き渡る段階というのは、ある意味泥縄でとにかく早くやろうというところがあったんです。佐倉駅も京成に近いようなところに通そうという計画はあったように思いますけど、結局町場の人々が反対したというような経緯もあって、田んぼの中の駅ということになった。そういう経緯も含めて、今の人たちが理解しておくことは佐倉にとって大事なことです。

結局同じことは方々で起きています。茂原駅もまったく同じですね、人がいないところをねらって鉄道を通してですね、駅も川の中に茂原駅を作ったんです。結局そういうことが積もり積もって、今の洪水等と密接に絡んでるので、やはりそういうところの歴史をたどることが、現代にやっぱり通じるのですよね。やはりその点は大事なのかなと思います。

[内田儀久委員長]

考え出すといろいろ出てきますね。

[中澤恵子委員]

『佐倉市史研究』第35号に関しては、もしかしたら特集で、今おっしゃったことも含めて、戦後80年、そういうことを特集的にする部分と論考の部分にするとか、35号に関しては、それで復活復刊みたいなものですので、特集にするのはひとつかなと思いますけれども、準備だとか、今からで間に合うのか。チームを作らないとできないんじゃないか。

[事務局]

特集の内容によると思われます。

[中澤恵子委員]

その特集が戦後80年ということをも銘打つと、わりにどこでもこれはもうやっているようなことなので面白くないかもしれないんですけども、やりやすく人の目につきやすい。だけど、それだけでは『佐倉市史研究』として物足りない方のためには、いろんな専門家の論考を載せるということもひとつの案です。これは第35号に関してだけですけど。準備が大変かもしれませんが。

[事務局]

大変は大変ですね。そういう意味では『佐倉市史』巻四の時には、インフラ関係の記事はあまり多くないような気がするんですけども、その辺はどうだったんですか。

[中澤恵子委員]

鉄道のことに限っては、白土先生が書いていらっしゃるんですよね。

[内田儀久委員長]

明治期は、『佐倉市史』巻三以外にも、『佐倉市史研究』にいくつか言及しているものがあると思うんですよね。ただ、そういう記事と写真は別な物なので、駅前区画整理の写真はどのくらいの量なんですか。あまり量が多いと時間がかかるのかな。十枚程度ならすぐに手が付けられるのかな。

[事務局]

JR 佐倉駅前の区画整理の写真を整理したものは、アルバム 1 冊になるぐらいだと思います。

[内田儀久委員長]

そうすると、『佐倉市史研究』第 35 号の原稿が揃ってどのくらい予算がかかってくるのかによりますよね。

[事務局]

次の議題に入ってしまいますが、まだやり尽くせていない部分を残して、次回の刊行事業に回すというのも 1 つの手かなと思ったりもします。

[川名禎委員]

ちょっと思ったんですけれども、先ほどの写真の話は、市民の方にその写真を見ていただいて、たとえば図書館とかと一緒にやっても良いんですけど、そういう関心のある方のグループ活動みたいな形で、皆さんで写真の分析みたいなことをして、その報告みたいな形で、個人名ではなくグループ名で記事にさせていただく。だから、論文という論理的な証明というわけじゃなですけれども、そこに写っているものが、どういうもので、いつ出来たということを調べていただいたものであれば、内容も割と身近なものでもあるし、市民の方も投稿できる。そういう個人じゃない分、いろいろその体裁も含めていろんな意見が出るので、統一もしやすいし、市民の成果としても『佐倉市研究』に投稿出来る。市史編さんの事業としてやるだけじゃなく、図書館との連携というものが必要なんだと思うんですけれども、博物館では博物館友の会からよく刊行物を出していますけれども、ちょっと大変かもしれませんけれども、そういうことがあって良い。

聞き書きみたいなものもそうですね。昔のこと、戦後のことだったらまだ知っておられますので、論文という形じゃないんですけれども、そういう形の投稿、原稿っていうのでしょうか、駄目ですかね。

[事務局]

この地元というか、図書館周辺の話でありますので、人が集まれば集まりやすいとも思いますし、人びとが感心して良いかと思えます。

[宮間純一委員]

ちょっと前に、松戸市が似たようなことをやっていて、松戸市で戦後の写真の展示をやっています。そうすると割と、すごく知っていて、ここにはお店があったとか、みんなで楽しそうにやっていて、それが市史に反映されていることがあるのを知っています。2004年に出している『写真に見る佐倉』に対する反応はどうだったんですか。

[事務局]

あつという間に売れました。

[宮間純一委員]

写真はやっぱりわかりやすいので、どこの市でも売れ行きが良いんです。鉄道や駅の写真もちろん良いんですけれども、『写真に見る佐倉』刊行後に集まってきた写真について、短い解説みたいなものを複数名の先生や市民の方をお願いして作ってみる。『佐倉市史研究』ではなくても、他に 1 冊作ってみるのも良いような気がします。そういうような事業をやっても良いのかなと思います。

2 万字もある論文みたいなものは、あんまり読まないじゃないですか。だから 1 本あたりの原稿は短くて良いと思うんですよね。『日本歴史』の正月の特集号みたいな感じなものも良いかなと思います。いかがでしょうか。

[事務局]

委員の先生方にも、いろいろ原稿をお願いしたいと思っているのですが、その辺はいかがでしょうか。

[宮間純一委員]

もちろん私は書きますよ。

[中澤恵子委員]

ページをいただけるんだったら、私も書きたいと思います。

[宮間純一委員]

『佐倉市史研究』第35号の話ということですか。

[事務局]

『佐倉市史研究』第35号につきましては、いろいろご意見をいただいた中で、売れる売れないはともかく試金石であることは確かです。ひとつ復活の狼煙を上げるためのものであれば、一般受けしなくても良いのかなという感じもあるんですけども、ある程度の反応は期待されているところなんです。しかし、本当に佐倉は歴史のまちだっていうことも、上層部の方も理解していますから、こういった信念のもとに出しているということが、ちゃんと明確に打ち出せれば、それはそれで成果があったというふうに認めてくれるんじゃないかと私は思っています。

[中澤恵子委員]

でも売れるか売れないかって、かなり大きくないですか。

[事務局]

そこはありますが、どれだけインパクトを与えられるかというところなんだと思っています。頒布の数というよりも、それに対してどういった評価が一般市民から得られるかというところですよ。

[宮間純一委員]

それで言いますと、今までおこなってきた議論なんですが、デジタル化した方がやっぱり良いんじゃないですか。もう刊行化した時点でデジタル化してしまって、紙で欲しい方もいらっしやると思うんで、その分は500部ぐらい持っておけば良いかなと思います。やっぱり、ネットで見る事が出来ると、皆さん見てくださると思いますし、ダウンロード数、アクセス数が出ますので、それがある意味の評価になり、可視化されます。

[事務局]

他の市で一部ダイジェスト的に論考の中で1部分だけPDFで紹介しているというものがあって、詳しい内容はお買い求めくださいという形があります。たとえば、外山先生の津田仙の話は、すごいタイムリーなんで、そういったものを一部ダイジェスト的なものだけ載せて、PRして行って、購入を促進するというようなのも売り方としてはあるのかなというふうに考えています。市川市は一部分ダイジェストとして、多分ホームページに上げています。

ただ費用的なところでいうと、作り方にもよりますが、ただホームページに上げて、紙の刊行部数を減らすだけでは、あんまり費用は変わらず予算は変わらないんですよ。

[宮間純一委員]

費用は下がらないです。tinyなんかで検索すると検索で『佐倉市史研究』が引かかるようになっているので、ここでワンクリックでそのダウンロードページに飛べるようにしておけばいいかな。経費の削減にはならないと思います。ただ見てもらうという回数は絶対に増えるので、佐倉市がやっているツイッター、Xに出してもらおうとか、そういうことをやると確実にアクセス数が増えるんで、お城が好きな人が見ると思うんですよ。そうすると、市の当局にこれぐらいの人がダウンロードしているとか、もっと分析すればこの地域からダウンロードしているのかわかると思うんで、そういう意味ではアピールになる。今の本の形だと、反応といっても、聞きましたとかそのくらいになっちゃうんで。図書館で誰がコピーしたとかわからないじゃないですか。

[川名禎委員]

そういう意味では、デジタル化が良いような気がします。もちろん、執筆者の了解が必要だから、駄目って言われちゃったらそれは載せられないことになります。今はもう大学の紀要とか全部書いた時点でオープンにされますし、それが当たり前なので、時期的にはそうすべきじゃないかなと思います。

[事務局]

そういう意味だとまだ在庫もいっぱいあったりするのですが、その辺は考えていかなければいけないと思います。

[宮間純一委員]

でも紙が欲しいという人も一定数はいるんじゃないですかね。

[内田儀久委員長]

今までの意見の中で、小高先生、中澤先生の選考などをする意見が、非常に良かったです。でもそれは『佐倉市史研究』第35号のなかで、それは出来ないかもしれないですよ。今までのルールと違うよと言われて困るので、だからそれは、次の号で何とか生かしたい。それは事務局にとっても、楽になるんじゃないかなあと思いました。

それから、『佐倉市史研究』第35号はもうこの中で、どうやって、予算との流れの中で決めていくと思うんですけども。何かJRの写真も非常に魅力的なんだけどすごい量があるとなると、もしかするとそれは次に送って再来年度にやっても良いのかな。

たとえば、夢咲くら館のギャラリーみたいところで、写真を伸ばして展示してやると市民からこういう写真があるよと出て来てくれるかな。それをお借りしながら足していくことも出来るのかな。これは、『佐倉市史研究』第35号の予算のなかで、写真を入れることが出来れば、入れてもらっても良いし、入らなかったら、そういうこともひとつなのかなと思いました。

あとは、事務局のほうでまとめていただければと思います。それでは『佐倉市史研究』第35号については、これまでといたします。次に【議題】1-2 再来年以降の『佐倉市史研究』第36号~について。話がちょっと重なっていますが、これについて事務局から説明をお願いします。

[事務局]

話題的には既に出て来ているのではないかと思います。『佐倉市史研究』第35号は刊行されるとは思いますが、それ以降は引き続き刊行できるかどうか分からない状態です。ですから、今から『佐倉市史研究』第36号以降も引き続き刊行する姿勢をアピールしていく形をとっていかないと、なかなか次に繋がっていかないと考えておまして、今回の議題にも第35号を刊行した後のことを出しました。

今までも出ているように、ひとつには特集記事を組むということです。人気の話題に目配りしつつ、なんらかの特集を組んでいく形もありかなと思います。昭和100年、戦後80年といった記念年にまとめ記事を掲載していくことはアピール度が高いかなと思うので、取り上げていくことを考えていったほうが良いと思います。

また、35号から連続した記事、35号にてやりきれなかったものを36号以降も続けていくという形で連続性を訴える形もあるのかなと考えています。

『城下町佐倉絵図集成』の扱いですが、35号の議題にて史料の見方の記事をいろいろな例にして挙げましたが、史料叢書も辞書的な使い方をされているものは、少しずつながら売れているのですが、なかなか売上げが伸びないものがあり、そういう史料集の使い方を紹介できれば良いかなと思います。

[中澤恵子委員]

『帝国在郷軍人会佐倉町分会 歴史』は、あまり人気がないのですか。『帝国在郷軍人会佐倉町分会 歴史』はあんなにまとまって最初から最後までであるというのは、他であまり見ません。だからその部分では、史料の見方ということで書けるような気がします。

[事務局]

『帝国在郷軍人会佐倉町分会歴史』は少しずつ売れております。史料集の売れ方は、細く長く売れる物だと思いますが、辞書を引くところから始めて、レポート的にこのように調べて記事をまとめていくんだよと教えるような記事があると史料を読む人が増えるのかなと思っています。

[中澤恵子委員]

『佐倉市史研究』第36号からはちょっと離れるかもしれませんが、私は『佐倉市史研究』のことは市史編さん委員会でも毎回言っていた気がします。

事務局には報告しているのですが、小竹公德社のお話なんですけれども、『佐倉市史』巻四を執

筆する時に調査をして、その後の状況を私はまったく把握していなかったんですが、それが最近わかったことがあるのです。そういう、あの時と現在の状況が変わっているということがわかった時とか、何か新たにわかった時に発表する場が『佐倉市史研究』にあると良いなと思っていたりしたんですね。

それとは別に『佐倉市史研究』第35号や第36号ではなくても良いのですけれども、そういうことを含めて、『佐倉市史研究』に足りない最新研究という候補記事に絡んでくることなのかなと思いついて聞いていたのですけれども、やっぱり連続性というようなことを考えると、記録だけはきちんとしていたほうが良いし、その記録を編さん室だけにせず皆さんにも知っていただく場として『佐倉市史研究』みたいなものがあれば良いなと思いついて、『佐倉市史研究』第35号の議題がなければ、今年もまた『佐倉市史研究』の刊行は、お願いしていたと思います。『佐倉市史研究』にいろいろ掲載すべきことがあることはわかるのですけれども、事務局サイドでわかったことを含めて、修正されるべきことや新たにわかったことを書く場があったら良いなと思います。

[事務局]

それはまさに『佐倉市史研究』の役割だと思います。

[中澤恵子委員]

明治30年に出来た小竹公德社という自治会的ものが、今から10年前ぐらいに解散になりました。史料はそのままそこで保存されているということが今回わかったので、是非そういうことを記録していかないと消えていってしまって、誰も知らないうちに、あの史料群はどうなったのかということにならないように、私が個人的に調査をしたのですけれども、市史編さん事務局に報告して記録しておいてくださいと言ってあるのですけれども、そのことだけでも良いからどこかに共有できる場が欲しいです。

[事務局]

『佐倉市史』考古編についても、今回予定原稿に挙がっていた縄文土器や大崎台遺跡のことも同じことだと思うのですけれども、『佐倉市史研究』の場合、重要な役割のひとつだと思います。そういう方向性はあると思います。

[中澤恵子委員]

私は後にわかったことを共有できる場が欲しいので、おおいに『佐倉市史研究』を活用していければなあと思いますし、そういうことも『佐倉市史研究』を続けて出すことの意義としてアピールしてください。

[宮間純一委員]

たとえば、これから長く『佐倉市史研究』の刊行が続く場合、各号で事務局の編集担当者と市史編さん委員から誰か一人を、その年の担当として付けたらどうでしょうか。実質的な編集作業をする訳ではないのですが、特集の企画などにあたって、原稿依頼者の人選の提案をしていただき、編さん委員会で審議をして、認めていただいで進めていきます。今事務局の担当者が一人で考えなければいけない状態から解放されますし、たとえば幕末ならば、僕もこういう人なら書けるかなということでリストアップできるので、そういうふうにしても良いかなと思いました。せっかく編さん委員として具体的な作業分担がないので、そういうお役目があっても良いのかなという気がしました。

[内田儀久委員長]

他にはいかがでしょうか。たとえば、来年度市史編さん委員会を開くなかで、予算が付きませんでしたといった時に、どうしようかということがありますが、ひとつには宮間委員がおっしゃられた選考委員をどうしようかということを考える時間を作ることが出来て良いのかなと思います。それで1年間とか空白を明ければ、そこで新たにいけるのかなとも思います。

[事務局]

今回いろいろなご意見をいただきましたので、今それを具体的にまとめることは難しいと思いますので、時間があまりございませんが、検討させていただいて、市史編さん委員会の話し

合いの場だけではなく、メールや手紙等にて意見を交換してまとめていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

[内田儀久委員長]

他によろしいでしょうか。それでは続きまして【議題】2 『城下町佐倉絵図集成』についての説明を事務局よろしくお願ひします。

[事務局]

今までの議題でも触れられて来ましたが、今年刊行された資料として、市史編さん事業ではなく、文化課が作ったものではありませんが、事務局の人間も作成に関与していますし、今日欠席の岩淵先生、そして川名先生が原稿をお書きになっていらっしゃいます。また、外山副委員長も本日委員会御欠席ですが、監修ということで関わっています。【議題】というには少し変かもしれませんが、本日は、川名委員しか関係した委員の方はいらっしゃいませんが、少しご感想などいただいて、市史編さん事業におけるこの史料集の位置づけみたいなものを確認したいと思ひます。よろしくお願ひします。

[内田儀久委員長]

川名委員よろしくお願ひします。

[川名禎委員]

私は携わったというか、原稿を少し書かせていただいたのですけれども、この企画自体は昔からそういうものを作りたいねと話していました。いろいろな博物館で刊行されたものを見較べたり、絵図の調査に行ったりしてきました。

ちょうどこの70周年というタイミングで出すのが良いだろうということで、文化課は企画を作るのがうまく、あっという間に企画書が出来まして、刊行にむけて準備が進んで、アート紙のような図録に仕上がっております。

先ほど細かい点がなかなか読みづらいいというお話がありまして、そういうところが多々あるのですけれども、絵図はなるべくアップの部分を取り入れていまして、文字おこしたのものの中に入っていまして、細かい字もあるのですが、いろいろと工夫がされていまして、写真を非常に良い他ではなかなか見ることが出来ない良い物に仕上がっているのではないんじゃないかと思っております。

[小高春雄委員]

川名委員がおっしゃったように、全体的にはその評価は高いと思ひます。良くやったなというところが正直なところですね。県内では、佐倉に引き続いて絵図があるのが、関宿。その次が大多喜。近世城郭ですよ。久留里も大多喜と同じくらいかな。でも数十点というわけにはいかないですね。佐貫とそれ以外は近世の陣屋絵図です。そういった点からしますと、佐倉は県内の近世城郭では非常に恵まれている。また、この恵まれた史料を刊行したということは評価できると思ひます。ただ欲を言いますと、コンパクト版にしましたので、これですべてという訳にはいかない部分があるのですけれども、これが出発点になるなという気がしますね。

[内田儀久委員長]

宮間先生いかがですか。

[宮間純一委員]

昨年兵庫県にたまたま調査に行くことがあったんですが、それで兵庫県立歴史博物館に佐倉の城絵図があるということをつたえ知って、それを今回載せていただいたので、私的には良かったなと思っております。佐倉以外にもこういう絵図があって、結構知られていないものがあるんだなと思っております、こういうものが刊行されると、また新しいものが確認されるかもしれません。

[中澤恵子委員]

今初めて見ているので、内容的なことはなかなかわからないのですが、非常にきれいです。小さい文字もありますけれど・・・。

[小高春雄委員]

デジタル版にしてくれれば拡大して見られるんですよ。

[内田儀久委員長]

出来は非常に良いです。せっかくこれだけのものを作ったのだから、市史編さん委員の先生方も関わっていますので、座談会というか一般の人が聴けるような座談会をやってもらえて、一般の市民の方にここはこう見るんだよねとか、ここがポイントだよということを話していただいたり、こういうところにあったんだよという話も広がるかな。佐倉には「古今佐倉真佐子」がありますので、先生方からここをこう見ると良いんだよということがありますと、佐倉を案内してくれる史跡案内ボランティアの方もいらっしゃいますので、そういう方にとっても参考になるのかなと思います、そういう座談会があったら良いなと感想として思いました。

[小高春雄委員]

付け加えて、言わせてもらいますと、絵図には絵図の変遷がございまして、各時代ごとに目的をもって作成されているわけです。正保城絵図もですね、17世紀代ですと結構主図合結図がほうぼうの城にあって、大多喜なんかはそういうものが4つ、5つあるんですよ。まあだいたい似たようなものが多いんです。大多喜だけではなくて、それが散らばって、他所で見つかることもよくあるんです。

ですから、これだけではなく、絵図の変遷のなかでこれをどう位置付けたら良いかということが大事なのかなという気がします。むしろこの佐倉の絵図群で言いますと、近世後期に非常に充実しているなというところがあります。ある意味似たようなものがたくさんあるとも言えるんですけども、それで城内の移り変わりなんか分かる訳ですから、残されている絵図群の価値というものをそういう面で評価できる。全体的な枠組みの中で評価したほうが良いと思います。何が目的で城絵図を作ったのかということを含めて、いろいろな対象の絵図があるので、その中で絵図を評価していくことが必要だと思います。

[内田儀久委員長]

3人それぞれの切り口があるようなので、事務局のほうでこれからどう活用していくのか検討をお願いします。感想をきくという感じで議題はよろしいですか。

[事務局]

感想を聞くというか、こういう史料集を活用していかなければいけないと思いますし、市史編さん事業の中でもいろいろと付け加えていくところもあると思います。

[内田儀久委員長]

そういったところをいろいろ考えていってください。【議題】2についてはこれで終わりにします。では「その他 土浮区有文書」について事務局から説明をお願いします。

[事務局]

土浮区有文書を入口に置いてありますけれども、今年の春先に土浮の区長が、こういう史料があるんだけどどうしたら良いかということでお持ちになられた史料です。見ていただければわかるとおり、江戸時代から明治時代にかけての史料をまとめて持ってこられました。持ってきた史料は一部であって、土浮区民館には箆笥に入ったものがいっぱいあるということなので、田んぼ仕事が終わったらそれを見に行く約束をしました。なかなか行けなかったんですが、年明けに、ようやく土浮区民間に行くことが出来ました。現物を確認したところまとまった良い史料であったので、箆笥ごといただいてきた史料になります。まだ燻蒸が終わっていない状態ですが、委員の皆様がたにも見ていただきたく、今回用意いたしました。

[中澤恵子委員]

これは寄贈されたんですか。

[事務局]

はい、そうです。これは『佐倉市史』巻四編さん時には確認されなかったんですか。

[中澤恵子委員]

事務局が探してくれたのですが、これは引っかかりからなかったようです。

[宮間純一委員]

佐倉ではこういう地方文書が出てくるのは珍しくありませんか。

[事務局]

古文書の悉皆調査がしっかりなされていないので、まだ出てくるかと思います。

[中澤恵子委員]

かなり大谷貞夫先生がしてらしたので、国学院大学の学生たちが目録を作っていたことがあるんですけども、まだ私たちがあの時は状況を確認した程度でしたので、調査をするともっと史料はあると思います。

[宮間純一委員]

侍の史料は知られているんですけども、百姓の史料はあまりなくて・・・。

[中澤恵子委員]

あることはあるんですけども、あの当時ちょっと難しかったんですね。

[宮間純一委員]

まとまっていて良い史料です。

[小高春雄委員]

たったこれだけの史料ですが、整理するのは大変ですね。

[内田儀久委員長]

長時間ありがとうございました。これで委員会を終了したいと思います。事務局の法に進行をお返したいと思います。

[利光尚佐倉図書館長]

2時間近いご議論ありがとうございました。

『佐倉市史研究』については、今日先生方からいろいろな話を伺って逆にデジタルの強みを活かしたやり方が出来るんじゃないかなと思った次第です。従来からの研究者の論文ですとか、一般からの投稿はそうですけれども、投稿規程はこれから揃えてやっていくことも出来るし、講演会、座談会みたいなこともして、その結果を載せていくとか、これまで佐倉市で刊行してきたものについて、一般の人にも取っつきやすいようなものをデジタルで載せていくとか、城絵図もデジタル化することで見やすくするとか、佐倉市は、最初市制を敷いた時には人口3万人ぐらいだったのが、今17万人ぐらいいらっしゃいますので、先ほどご意見いただいた市民の写真の研究だとか、町が大きくなっていた変遷図だとか、市民の方が喜んでくれるようなことを作り込んでいくということをしながらか、『佐倉市史研究』もすこしずつ変わっていくところにいるんじゃないかなと個人的には思いました。

『佐倉市史研究』は年度ごとにまとめて出していくのか、随時出来次第出していくような形になるのかとか、またいろいろ考えるところがありますが、いずれにしてもハードな面、どういう形で出版していくか、世に出していくのかということとはともかく、中身を作っていく作業はやめてはいけないんじゃないかと言うことは思いました。

今日はいろいろありがとうございました。